

集団における「調整役」の役割について

○畑 綾佳¹・長谷 和久²

(¹ 山口大学大学院教育学研究科・² 山口大学教育学部)

本研究の目的

三隅（1966）のPM理論や堺（1998）の遊び場面の研究など、さまざまな集団研究においてリーダーの役割は頻りに論じられている。集団や組織にとって良いリーダーやリーダーシップとはどんなものかという議論は時代の変遷とともに続いている。しかし、集団の構成員における役割として考えられるものはリーダーのみなのであるか。

近年、新しいリーダーシップの形として、シェアード・リーダーシップが提唱されている。石川（2013）は、シェアード・リーダーシップを、チーム・メンバー間でリーダーシップの影響力が配分されているチーム状態と定義している。集団の構成員がそれぞれ役割をこなしている状態といえるだろう。

本研究においては、集団の構成員における役割として「調整役」を仮定し、「調整役」は集団・グループ内で、その集団のメンバー同士のコミュニケーションを陰ながら支える人と定義する。本研究では、その集団におけるリーダー以外の調整役に存在について問い、調整役の有無や様態によって集団構成員の関係満足度が変化するかを調査することを目的とする。

方法

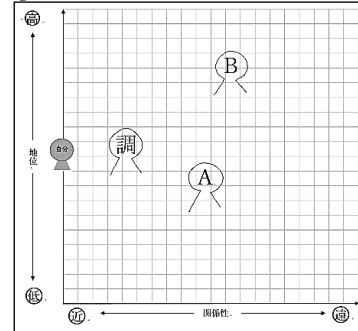
調査協力者 X大学の部活動に所属している学生33名（男性17名、女性13名、回答しない3名、 $M_{age}=19.67, SD_{age}=1.22$ ）とX大学の職員18名（男性9名、女性9名）。

手続き 2024年7月から2024年10月中旬までに学内でアンケート用紙を配布し実施した。

質問項目 所属している集団の「調整役」の有無を尋ねた。調査協力者の集団関係満足度を測定するため黒川・吉田（2006）の仲間集団関係満足度尺度を尋ねた。加えて、調整役に対する評価を求めるため、独自項目と相川他（2012）のチーム志向能力尺度とバックアップ能力尺度、モニタリング能力尺度を尋ねた。集団内での調整役と重要な他者との心的な距離を測定するため、集団内での心的距離を測定する図

（Figure1）に記入を求めた。

Figure 1 集団内の心的距離を測定する図：記入例



結果と考察

集団内での心的距離を測定する図において、「自分」と記載された地点を基準として、記入された調整役と重要な他者の横方向の距離をそれぞれ調整役関係性得点、重要な他者関係性得点として求めた。HAD（清水,2016）を用いて相関分析をおこなった（Table1）。その結果、個人の仲間集団関係満足度と、調整役関係性得点、重要な他者関係性得点との間に有意な相関関係が確認された。一方で、仲間集団関係満足度と調整役に対する評価を尋ねた各尺度得点との間に有意な相関は確認されなかった。

Table 1 相関分析の結果

	M	SD	1	2	3	4	5	6	7
1. 仲間集団関係満足度尺度	3.52	0.61	—						
2. 調整役関係性	4.27	2.38	-.40**	—					
3. 重要な他者関係性	5.09	2.35	-.40**	.21	—				
4. SD法	3.56	0.91	-.09	.07	.16	—			
5. 独自尺度	3.72	0.33	.06	.06	.16	-.06	—		
6. チーム志向能力尺度得点	4.36	0.63	.48**	-.06	-.11	.10	.26	—	
7. バックアップ能力尺度	4.57	0.61	.60**	-.14	-.16	.07	.34*	.71**	—
8. モニタリング能力尺度	4.23	0.63	.49**	-.15	-.18	.10	.44**	.72**	.80**

** $p < .01$, * $p < .05$

仲間集団関係満足度を目的変数とし、調整役関係性得点と重要な他者関係性得点がどう影響しているのか検討するために、重回帰分析をおこなった。その結果、調整役関係性得点 ($\beta = -.331, p < .05$) と重要な他者得点 ($\beta = -.334, p < .05$) どちらも有意な偏回帰係数が得られた。調整役とそれ以外の重要な他者との関係性が独自に集団関係満足度と関連していた。

以上から、単に集団凝集性が高ければ良いということではなく、調整役との関係性が近いことで個人の仲間集団関係満足度が高くなることが示唆された。